

フランス政府の給費で留学した電電公社のOBが集まるGASEFという会がある。機関誌を発行するので何か書くよう依頼され、一文を作成した。筆者は「異方式テレビジョン映像信号の国際接続」というテーマで留学したので、自然に無線に関する話題が多くなる。そこで、無線支部の会員が関心を持ちそうな部分を抜粋して編集し、会報に投稿した。ご参考になれば幸いである。

筆者が羽田空港を出発したのは1964年9月で、パリを中心に約1年間留学した。東京オリンピックの開催が同年10月だったので、私は東京オリンピックを見ていない。なお、私の先輩では松本高士さんが1960年に留学している。

〈1〉国際会議への出席

1965年2月、CCIR（現在のITU-R）の中間会議がモナコのモンテカルロで開催され、電電公社からPCMマイクロ波方式に関する新質問（Question）の設定を提案する文書が提出された。本件については留学前に話を聞いて居り、文書の作成について筆者も参画していた。留学先のフランス通信省に「この国際会議では通信衛星への周波数割り当てが議論されるので、筆者の留学目的に大変参考になる」と説明し、会議に出席したいと言上した。この点フランスはおおらかな国である。「ホテル代は出せないが、往復の旅費は面倒を見よう」と言ってくれた。

モンテカルロといえば超一流のリゾート地である。ホテルの宿泊費はパリよりはるかに高価で、留学の給費（1ヵ月5万4000円）から払える金額ではない。幸い、電電公社のジュネーブ事務所が2年ほど前に設立されていて、初代事務所長は元施設局無線課長の安藤健二氏であった。筆者は安藤氏の部下で居たことがある。その縁で安藤氏は、モナコで事務作業をするアルバイトを雇用したことにして筆者のホテル代を支払ってくれた。

会議には郵政省、KDDのほか電電公社の研究所と技術局の土井博之無線担当調査役が出席していた。土井氏も良く存じ上げている方であり、提出文書のプレゼンテーションは君に任せると言われてしまった。もちろん、中味については詳細に理解している。JAPANと名札が置かれた席に座り、英語で発言したが、フランス席には顔見知りのCNET（通信省の研究所）の方が居て、こちらを不思議そうに見ておられた。

新質問の設定は、出席していた各国の代表が「これからの重要な課題である」と一様に理解して下さり、異論なく承認して頂いた。積極的なサポート意見として「なるべく早く各国に周知した方がよい」という発言があり、事務局から回覧文書を加盟国に送り、次回の総会を待たずに質問が設定されることになったのは望外の成果であった。



次回の総会は1966年にオスロで

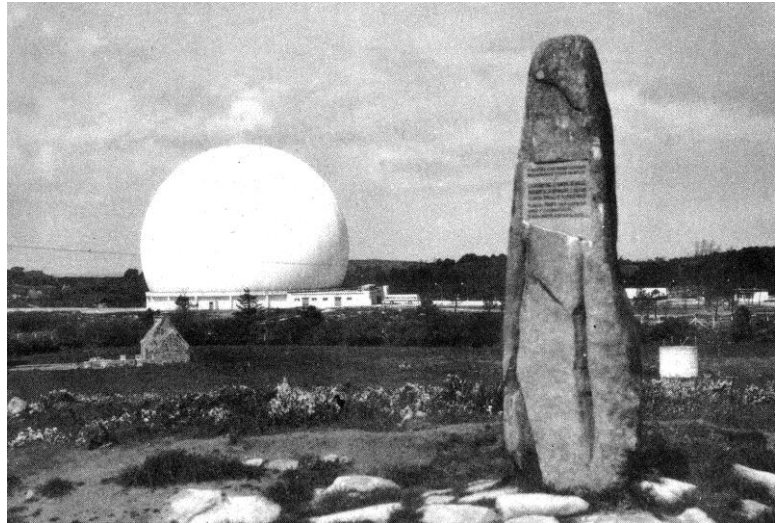
[写真 CCIRに出席した頃の筆者（31歳）]

開催された CCIR 第 XI 回総会である。これに再び日本から「Report」の作成を提案する寄与文書を提出したのだが、質問の設定と Report の作成は全く次元が異なることを、総会において厳しく理解させられることになる。因みに総会出席者は肥後大介局長、西條利彦無線課長、池上文夫研究室長、岩崎昇三調査員、安藤ジュネーブ所長、筆者である。

(2) 衛星通信基地局での研修

留学中の研修スケジュールの一環としてプレミュールボドー衛星通信基地局の見学を入れておいたので、65年3月から4月にかけて同基地局での業務内容を調査させて頂いた。この基地局は CNET ラニオン支所が組織名である。

ラニオンというのはフランスの北西部、ブリュターニュ半島の突先に近く、サンマロ湾に面した人口2万弱の小さな町である。ブリュターニュ地方の中心都市レンヌ



[プレミュールボドー衛星通信基地局]

からさらに約 150 km 北西にあり、レンヌから列車で 2 時間近くかかる。パリからレンヌまで現在は TGV が走っていて 2 時間で行けるが、当時は 5 時間位かかったように記憶している。なお、レンヌの北方 100Km のところに有名な世界遺産、モンサンミシェルがある。

衛星通信基地局はプレミュールボドーというところにあるが、残念ながら世界地図には載っていない。直径 5~60m のドームがあり、その中に長さ 30m 以上もあるホーン・レフレクター・アンテナが収められている。円盤の上に乗っており、モーターで自由に方向を変えられる。仰角も 0~90 度、自由である。ドームから近いところに、ドゴール大統領が建てたと言う記念碑があった。

これは筆者の計画外のことであったが、1965 年 4 月 6 日、世界で最初の商業通信衛星インテルサット 1 号が米国ケープカナベラルから打ち上げられた。このとき、筆者はちょうど衛星通信基地局内の管制室に居て、衛星の位置が刻々と報告される様子を目の当たりにすることができた。プレミュールボドー基地局から米国に送られたデータも活用されていたに違いない。この場に立ち会った日本人は筆者以外に誰もいなかったことは確かだが、米国の管制センターに KDD の技術者が居たかどうか、筆者は承知していない。

以下は留学に直接関係ない余談である。CNET にもブリッジの同好会みたいなものがあるらしい。ラニオン支所にも好きな人が何人か居られ、ときどきプレイして遊んでいた。筆者も中央学園での入社訓練の際に、日本ではトップレベルの競技実績を持つ長谷川寿彦氏から教えを受け、同期生でプレイをしているうちに、人前に出ても恥ずかしくない腕前になっていた。ラニオンの仲間に入れてもらい、何度かプレイさせてもらった。ハート、スペード、ノートランプ、ダブルなどのビッドを全てフランス語でいうので、最初は少し面食らったが、それに慣れてからは適当にお相手ができ、研修でたまったストレスの発散に役立ったように思っている。